“こどもピースサミット 2026”

平和の意見文集



平和の意見発表会

令和８年６月１３日（土）

ＪＭＳアステールプラザ

広島市教育委員会

平和への誓い

もしも「大切なもの」が一瞬で消えてしまったら、どんな気持ちになるのでしょうか。

私たちが笑い合っているときにも、尊い命が失われている現状があります。
今もどこかで、当たり前の日常がうばわれています。

ぼろぼろになった制服。
黒く焦げたお弁当箱。
それは、当たり前の毎日を生きていた証です。
昭和２０年（１９４５年）８月６日、午前８時１５分。
たった一発の原子爆弾が、人々の暮らしを、人生を地獄に変えました。
髪は焼けちぢれ、全身の火ぶくれが破れ、火傷した皮膚が垂れ下がった人々。
「痛いよ。苦しいよ。」
「助けて、お母さん。」
「死にたくない。」
「助けてあげられなくてごめん。」
死んでしまうつらさ、生き続ける苦しみは、想像することさえ恐ろしいことです。

私たちには、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、
当時の記憶を事実として受け止める使命があります。
目をそらさず、知ろうとすること。
悲しい現実でも向き合うこと。
そこには、「生きたかった人々」、「生き続けた人々」の思いがあります。

私たちには、広島のこどもとして、行動する責任があります。
相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること。
平和への思いを、自分なりの方法で表現すること。
一人一人の小さな行動が、平和への後押しとなります。

平和とは、誰かからあたえられるものでなく、世界中の人々で創り上げるものです。
こどもである私たちも、その一員として平和への一歩を踏み出します。
かけがえのない「大切なもの」を、確かな希望を、未来へ届けるために。

令和８年（２０２６年）８月６日

こども代表　広島市立高須小学校　６年　柿崎　由宇
広島市立高南小学校　６年　河野　和希

もくじ

学校名	名　前	発表テーマ	ページ
八幡東小学校	妹尾　旭	差別のない平和な世界へ	1
五日市小学校	山本　愛華	「言葉」だけに縛られない	3
藤の木小学校	中村　颯太	ささやかな平和を広げて	5
なぎさ公園小学校	藤岡　弥希子	ヒロシマをいつまでも、いつまでも	7
袋町小学校	古江　深心	受け継いだ命、語り継ぐ意味	9
本川小学校	永原　ひかり	声を世界に届ける	11
戸坂小学校	新谷　航生	復活の地広島で僕たちができること	13
牛田新町小学校	石亀　衛	あの日のことを忘れないために	15
牛田小学校	井上　晃成	当たり前の毎日	17
矢賀小学校	佐伯　彩希	本当の思いを	19
大州小学校	藤井　璃太	広島に住む子どもの責任とは？	21
比治山小学校	長本　亜怜	知ること、知ろうとすること	23
皆実小学校	鎌田　桜空	似島で学んだ命の重み	25
観音小学校	内田　莉乙捺	みんなで築く本当の平和	27
鈴が峰小学校	大田　航史郎	「おはよう。」僕からまく、平和の種	29
高須小学校	柿崎　由宇	未来につながなくてはならないこと	31
川内小学校	松田　美由子	忘れない　戦争の記憶	33
高南小学校	河野　和希	みんなで作り上げる温かい場所	35
矢野小学校	和田　啓汰	原子爆弾は僕たちに何を教えたのか	37
みどり坂小学校	福井　紗都	私たちがつなぐヒロシマの記憶	39



差別のない平和な世界へ

広島市立八幡東小学校　妹尾　旭

原子爆弾による赤みがかった朱色の雲とともに一瞬にして消え去ったもの。それは命、心、そして、未来。それらは、一人に一つしかない貴重なもの。それをうばうということは、とても恐ろしく、取り返しのつかないことです。広島では、今まで原爆ドームを残し、平和サミットを開くなど、あの日の現実を風化させないように努めてきました。それは、命を守り、一人一人の思いや未来への希望を尊重するためではないでしょうか。

しかし、世界では、戦争により、今この瞬間もたくさんの命がうばわれています。戦争以外でもその命が、偏見や差別などで失われている現状もあります。この現状をそのままにしていていいのでしょうか。差別は、迫害になったり、対立を生んだりして戦争になるかもしれません。差別を無くすことは平和につながると、ぼくは考えます。

ぼくは小さいころ、基町高層アパートに住んでいました。学校の平和学習で学んだことについて、母と話した時に、

「はじめは、住む家がなくて困った人たちが造っていたんだよ。」

と教わりました。そんなことは、全く知らなかったので、自分なりに調べてみることにしました。被爆後、広島市中心部では、行き場を失った人が自力で建てた約千戸の家が集まっていたことから、「原爆スラム」と呼ばれてしまったことを知りました。国や県、市が協力して衛生面や安全面などを整え、今のようになったそうです。かつてスラムだったというイメージや、戦争から

帰国した人や外国の人も住んでいたことから根強い差別の原因になったとも書いてありました。ぼくは、ただ住んでいるだけでどうして差別するのか、そこに住んでいる人と関わるなというのか分かりませんでした。ぼくは覚えていないので、どんな人が住んでいたのか、どう接していたのかを、母に聞いてみました。母は、

「周りの人は、みんな優しくて、兄弟みんなかわいがってくれていた。」

と話していました。今でも、祖父母に会いに基町高層アパートへ行くと、エレベーターで出会った時、

「大きくなったね。」

と声をかけてくれる人もいます。もし、偏見があったとしても、ぼくにとっては大好きな場所です。

今、世界中で国籍や住んでいる場所、民族、人種、宗教などで一くくりにして差別してしまっている現状があります。一人一人とふれ合ってみると、それが間違いであることに気付くはずです。ぼくは、まず、あいさつをしたり、自分から話しかけたりすることで、相手のことをよく知ることから始めようと思います。学校での偏見や差別は、いじめにつながります。ぼくたち六年生が中心となって学校全体にいじめという名の偏見や差別を無くそうという雰囲気を広げていきます。

これらのことで、一人一人の考えが変わり、差別や迫害を無くすことができれば、少しでも平和な世界に近づいていくはずです。少しずつでもいい。その少しずつで、世界から戦争がなくなり、核兵器がなくなり、世界中が平和になっていくとぼくは信じています。



「言葉」だけに縛られない

広島市立五日市小学校　山本　愛華

１９４５年８月６日、あの日。

私のおじいちゃんは、原子爆弾のきのこ雲を見て、すぐに広島に助けに行きました。おじいちゃんの勇気ある行動のおかげで、助かった命がたくさんあります。おじいちゃんの勇気ある行動に、人を思う気持ちの強さが伝わってきました。そのおじいちゃんももう亡くなり、おじいちゃんのように実際の悲惨な光景を見た人たちもいなくなってきています。原子爆弾の悲劇を体験した人たちがいなくなった世界で、目指すべき平和を、罪なき人々が殺される戦争の悲惨さを語り継いでいくにはどうしたら良いのでしょうか。私は、その答えを見つけました。それは、芸術という表現です。

私は、障害者と広島交響楽団のジョイントコンサートである「広島マーガレットコンサート」に、障害のある妹の家族として合唱に参加しました。出演者の人たちは、緊張する私たちにとても優しく話しかけてくれて、私は心がふわふわと温かくなりました。その年は、終戦８０年の節目ということもあり、選曲が全て平和を願う曲でした。そこでは、障害のある人もない人も、高齢の人から子どもまで、様々な方が歌を通して、みんなで一丸となって必死に平和を訴える姿に心を打たれました。きっと音楽が心に響いたのではないかと感じました。さらに、このコンサートは手話つきで、多様な表現の素晴らしさを実感しました。

この世界には、いろいろな人がいます。もちろん考え方も違います。考え

方が違う人々の間で、平和の大切さを永遠に語り継いでいく方法、それは「言葉」だけに縛られずに、芸術でも平和を表現することです。「そんなのは、もう誰かがやっているのでは？」そう思うかもしれません。この方法は、作り出す人と観たり聞いたりする人で、お互いのことを想像する力が身に付きます。作り出す人は、「どうやったら自分の思いを伝えることができるだろうか。」と考えることで、悲劇を繰り返さないために不可欠な想像力が身に付きます。観たり聞いたりする人は、作者が何を伝えたいのかを考えることができ、想像力が身に付きます。この想像力は、「もし自分だったら、相手だったらどう思うか。」を常に考える力になります。この力があれば、「こういう戦争をしたらどうなる。」と自らの手を止めることができます。戦争は、方向性の違いで起こります。しかし、その前に「他者への想像力」があれば、「確かにそういう考えもあるのか。」「このまま戦争をしたら、両者ともに何も得るものはない。」と立ち止まることができます。

「芸術」は、絵画、音楽、俳句、演劇…、数えきれないくらいあります。その中から、何でも良いので平和を表現してみたらどうでしょうか。「私は、センスがないし、得意なものもない。」と思う人がいるかもしれません。でも大丈夫です。一生懸命表現されたものを見た人の心には、必ず感動が残ります。みなさんにも何か、できることはあるのではないでしょうか。何かしらの方法で平和を表現することで、世界平和に大きく貢献することができるのです。私は、「言葉」だけに縛られずに自分なりの方法を見つけて、平和を表現していきます。



ささやかな平和を広げて

広島市立藤の木小学校　中村　颯太

ぼくが平和について考えようと思ったきっかけは、ひいおばあちゃんの話を、お母さんから聞いたからです。１９４５年、昭和２０年８月６日の午前８時１５分、原子爆弾は落とされました。ぼくのひいおばあちゃんは、爆心地から数キロも離れていないところで、２０歳ごろに被爆したそうです。おばあちゃんは、建物から出て防火用の桶に飛び込み、人の山の下敷きになっていました。なんとか抜け出したけれど、裸足だったから、地面に落ちたガラスや瓦礫で、身動きが取れない状況だったそうです。ですが、誰かは分からない人が草履を渡してくれて、逃れることができました。ぼくはその話を聞いて、そんな「自分が死んでしまうかもしれない状態」で、他の人の命も救おうとするような優しい人がたくさんいたら、戦争は起こらなかったのではないかと思いました。

ぼくにとって平和とは、世界中のみんなが笑顔になり、自分と違うところがあっても認め合えることだと思います。学校の平和学習で、かつて大きな戦争や原子爆弾による被害があったことを学びました。たくさんの大切で重みのある命や、あたたかい日常が、一瞬にして奪われてしまったことを想像して、とても胸が苦しくなりました。そして、一瞬にして命を亡くされた方々の気持ちが、ぼくの中に込み上げてきました。こんなひどい悲劇は、二度と繰り返してはいけません。もし今、戦争が起きれば、友達と笑い合う時間も、大好きなことに熱中する自由も、すべて失われてしまいます。

でも、平和はただ「戦争がないこと」だけではないと、ぼくは思います。学

校でも、友達の悪口を言ったり、自分勝手な行動でケンカになったりすることがあります。そういうとき、自分の意見だけを無理に通すのではなく、「あの子は今、どんな気持ちかな」と、相手の立場に立って考えることも大切です。そして、このことこそが、本当の「つよさ」ではないでしょうか。みんなが互いの個性を尊重し、思いやりの心を持てば、いじめも戦争もなくせると確信しています。

平和はお金で買うことはできません。だから、ぼくにできることを二つ考えました。一つ目は、家族や友達に思いやりをもって接し、みんなの笑顔を増やすことです。例えば、友達が一人で寂しそうにしていたら自分から声をかけたり、家では家族に「ありがとう」と言葉にして感謝を伝えたりします。自分がされて嫌な言葉遣いや、仲間外れにするような意地悪は絶対にせず、誰にとっても居心地の良い場所を、自分から作っていきます。

二つ目は、過去の悲惨な歴史をただの知識で終わらせず、自分の言葉で周りの人へ伝えていくことです。本や映像から学んだ「戦争の恐ろしさ」や「平和の尊さ」を自分の中でしっかりと考え、家族や友人に語り継ぐことで、平和の輪を広げていきます。

いじめや争いが起きているとき、ただ黙って見ているだけでは、平和は守れません。おかしいと思ったことに対して、勇気を出して声をあげること、そして当事者たちの間に入って対話を促すことが必要です。周りに流されず、相手の立場に立って行動する。その一歩を踏み出す勇気こそが、平和のはじまりではないでしょうか。毎日ごはんを食べること。みんなと楽しく過ごすこと。そんな「当たり前の日常」という名の、ささやかな平和を、ぼくは大切に守っていきたいです。



ヒロシマをいつまでも、いつまでも

学校法人鶴学園なぎさ公園小学校　藤岡　弥希子

今年は戦後８１年。あの日のことを証言できる人は年々減っています。広島ではまだ原子爆弾のことを報道していますが、東京では８月６日になっても、原爆の日と意識しないと聞きました。ヒロシマの原子爆弾投下のことは世界からどんどん忘れ去られているのです。

そんな中、私の祖母は数少ない被爆証言者の一人になりました。昨年、私は学校で「夕焼けの彼方に…」という朗読劇をしました。それは岡田恵美子さんの証言を基に作られた物語です。

私が家で練習している様子を見た母は、同じような体験をしている祖母に、「自身の体験を子どもたちに伝えてみたら」と勧めました。その言葉に背中を押され、祖母は初めて原稿用紙十枚に、祖母の母から伝えられたことを書きました。８０年間、他人に語ることはなかった祖母が、初めて誰かに伝えようとしてくれたのでした。

そして、ついに私の学校で被爆証言を行う日がやってきました。祖母は生後わずか９か月の赤ちゃんの時に被爆しました。原子爆弾が投下された瞬間、家の中で寝かされていた祖母は床下に吹き飛ばされたそうです。庭にいた祖母の母はかすかな泣き声を頼りに見つけ出し、防空壕へ走りました。その時祖母は無傷でしたが、祖母の母は自分の腕の血で祖母が血まみれになっているのを見て、わが子が「やられた」と思ったそうです。祖母は、「あの時、母が守ってくれた私の命は、子どもや孫につながっています。」と言いました。

また、祖母が袋町小学校に通い始めた頃、祖母の父が家の前のマンホールのふたを開けると、小さなお骨が出てきて、供養塔に納めたそうです。原子爆

弾が落ちて火の海の中、ここは安全だろうと思い入れたのではないのだろうか。私はその子どもがどれほどお母さんに会いたかったか、自分には考えられないほどでした。

また、祖母の話を聞いた私のクラスメイトからの感想で、「原子爆弾が落とされた日だけじゃなく、その後も悲しいことが続いていたんだと伝わりました。」という言葉に祖母は笑みがこぼれていました。その表情は、自分の言いたいことを分かってくれたからのように見えました。しかし、講話の途中では涙があふれそうで、声が震える時もありました。そんな祖母を私は初めて見ました。そしてすごく胸が痛みました。

祖母の話を聞いた後、私のクラスは見事に朗読劇をやり切りました。私の役は主人公のよしこでした。よしこは夕焼けがきらいでした。なぜなら原爆の日のことを思い出すからです。その役を、私は祖母の話を胸に演じました。劇を見た保護者からは、「平和ということをより深く考えさせられた。」など多くの感想が寄せられました。また祖母も、「よかったよ。」と言ってくれ、私はその言葉がとてもうれしかったです。

祖母は「争いたい心を無くす。」という言葉で話を締めくくりました。争いたい心があるからこそ、仲間割れが起き、戦争が起きています。そして、戦争のせいで飢えに苦しんだり、罪のない人が殺されたりしています。しかし、その人も、誰かを愛し、愛されているのです。愛されていない人なんていません。だから、だれも殺されてはならない。祖母の言葉にはそんな意味が込められているように思いました。

私は祖母の大切な孫の一員として、また、未来の平和をつくる人として、胸を張って生き、平和を愛する気持ちを誰よりも持ち、深く考えていこうと思います。そして、原子爆弾のことをいつまでもいつまでも、つないでいきたいと強く思っています。



受け継いだ命、語り継ぐ意味

広島市立袋町小学校　古江　深心

「怖い。もう見たくない。」

８月６日の登校日。当時１年生の私は、学校で原子爆弾投下後の映像を見ました。川に浮かぶたくさんの人、骨が見えそうなくらいの火傷を負いながら水を求める人、やっと見つけた家族の遺骨も触れると粉のようになって拾うことさえできなかった、という数々の出来事に怖さを感じ、目をつぶったり顔をそむけたりしたことを、今でも覚えています。

けれど、被爆体験を聴いたり、平和記念公園を訪れたりする中で、少しずつ私の気持ちが変わっていきました。戦争は遠い昔のことではなく、今、自分が生きているこの広島で実際に起こった現実なのだと。そう感じるようになると、初めは怖いと思っていたことに、少しずつ向き合えるようになりました。

５年生のときには、袋町小学校平和資料館で、見学者への説明活動も行いました。内容を説明することはできましたが、平和への想いが相手に伝わっていたのか、私は自信がもてませんでした。相手の心に届くには、自分事として戦争と向き合うことが必要ではないか。その思いをきっかけに、これまで怖くて聞くことを避けてきたひいおじいちゃんの被爆体験についてもっと知りたいと思うようになりました。

ひいおじいちゃんはすでに亡くなっているため、おじいちゃんの弟に会いに行き、話を聞きました。ひいおじちゃんは当時１４歳。その日、働いていた兵器工場がたまたま休みだったため、爆心地から約１キロメートル、縮景園近くの下宿先で被爆しました。爆風で身体が吹き飛ばされたことで頭

に大けがを負いました。それでも倒壊した家屋の中からなんとか外へ出て、火を纏った竜巻を避けながら、川を渡り、足を止めることなく何キロも何キロも移動して避難しました。翌日、東広島の自宅に戻った後、二週間あまり高熱に苦しみ、生死をさまよいながらも生きのびることができました。

けれど、この話は家族のだれにも話さなかったそうです。被爆者健康手帳の申請書を取り寄せることで、被爆体験が明らかになりました。

「どうして家族のだれにも話さなかったの。」

手にしたひいおじいちゃんの写真を眺めながら問いかけました。もちろん、その返事を聞くことはもうできません。

それでも私は想像することはできます。あの日、ひいおじいちゃんの目に映った景色はどれほど悲惨なものだったか。自宅へ生きて帰ったとき、両親に会えたことがどれほどうれしかったか。もしも、ひいおじいちゃんに会えたなら、私たちにどんなことを伝えたいだろうか。

必死に生き抜き、私の命へとつないでくれたひいおじいちゃん。７６歳で亡くなったひいおじいちゃん。「ありがとう。」と直接言うことはできませんが、今を生きている私が、「二度とあの日のような苦しみを繰り返してはいけない」という想いを後世に伝えていくこと。それが私にできることだと強く感じました。

被爆から８１年。被爆者から直接話を聞くことが難しくなっている中、被爆者の想いを知り、考え、自分の言葉で伝えていくこと。その積み重ねが、平和へとつながる一歩になっていくのだと信じています。私もそうであったように、平和への意識は、きっと変わっていくものです。だからこそ、これからは私が平和をつないでいく存在として、一人でも多くの人の心を動かすことができるよう、平和の大切さを伝え続けていきたいです。ひいおじいちゃんの顔を思いうかべ、その想いを言葉に乗せて。



声を世界に届ける

広島市立本川小学校　永原　ひかり

「攻げき」「核兵器」

最近、ニュースや新聞などで、この様な言葉を聞くようになりました。その言葉を聞いて、私は今、この瞬間も辛い思いをしている人がいると思うと、心がギュッと締め付けられました。

私は「憎むべきは人ではなく戦争」という被爆者の方の言葉が心に残っています。つい「あの国が悪い」「あの人が悪い」と考えてしまうけれど、そうではなくて、相手への「思いやり」の心を失って憎み合う「戦争」が悪いのです。なぜ「戦争」を憎むのか、どんなに「戦争」はひどいものなのか。本川小学校に入学し、平和学習の中で、私は被爆者の方たちの原子爆弾で体験した事を語ってくださった話が心に残っています。

私の曾祖母は、当時看護師をしていて、救護の時に入市被爆をしています。曾祖母に原子爆弾の話を聞いてみましたが、

「ものすごい数の火の玉を見たんよ。」とだけ話してくれました。けれど、とても辛そうな表情で、「あまり話したくないね。」と言っていたので、くわしく話を聞くことができませんでした。曾祖母の原子爆弾の経験は、思い出すのもいやなぐらい、辛い経験だったのだと思います。

そんな辛くて悲しい原子爆弾の経験を話してくださる被爆者の方たちの言葉は「貴重」なものであり、「憎むべきは人ではなく戦争」という事実を忘れないために、私たちが次の世代、そして世界中に伝えていく使命があると思

います。

「戦争はしてはいけない」と私たちに語ってくれているものは被爆者の方たちだけではありません。被爆建物や被爆樹木、平和資料館などのようにたくさんあります。例えば、本川小学校の平和資料館にいる被爆ニワウルシは「もっと世界に核兵器のおそろしさを知ってほしい」と思っているはずです。広島平和記念資料館にいる被爆したお弁当箱は「おいしくご飯を食べてほしかったな」と思っています。　その一つ一つの声に耳をかたむけ、私が代弁していきたいです。一つ一つの声が小さなものであっても、平和を願う人たちの声を集めたら、大きな声になって世界を動かせると信じています。

本川小学校にある被爆建物の平和資料館は「罪もない子どもたちが一瞬で死んでしまったことを知ってほしい」と思っています。この平和資料館の思いを伝えるために、私たち本川小学校の６年生は「説明活動」をします。平和資料館にある展示物を見てもらい、来てくださった方々へ過去にこの場所でたくさんの人たちが亡くなった現実を知ってもらえるように心を込めて説明する活動です。

今、広島で起こった事を知らない人たちや戦争はしてはいけないと思っていない人たちはまだたくさんいます。その人たちにも私たちの声を届けていきたいです。私たちの声を聞いた人がまた次の人に伝える。それを繰り返していくことで被爆者の声は世界に届くはずです。なので、私は自分の思いを強く発信して、聞いた人が他の人に伝えなければと思うように説明活動に取り組んでいきます。

被爆者の声が途切れないために。



復活の地広島で僕たちができること

広島市立戸坂小学校　新谷　航生

僕たちが生きているここ広島は、世界で初めて原子爆弾が落とされてから、人々と共に歩んできた「復活の地」です。今、被爆者が減少している中で、僕たちにできることはないのか、自分に問いかけることが必要だと、考えました。

１９４５年、８月６日午前８時１５分。雲一つない広島の空に、原子爆弾が落とされました。この一発の爆弾が人々を地獄に引きずり落としたのです。キノコ雲の下で熱風が吹き荒れ、約三千から四千度の小さな光が人々を攻撃しました。

水を求めて、次々に息絶えていく人々。亡きがらとなった大切な人に叫び続ける人々。８１年も前に、ここでこのようなことが起きたとは、とても想像ができません。この一発の原子爆弾で、その年に１４万人もの人が亡くなったと言われています。どうして自分だけが生き残ってしまったのだろうと自分を責め、嘆き苦しんだ人が多くいたと言われています。

生き地獄となった広島には「７５年間は草木も生えぬ」と言われたほどに壊滅的な被害を受けたにもかかわらず、諦めなかった人たちがいました。被爆してから３日後には、一番電車が走り、人々に大きな希望を与えてくれました。

「いつまでもこのままではいけない。」

「自分にもできることがあるはずだ。」

多くの人が立ち上がり、支え合ったことで、今の広島へとつながっていると

思います。希望も何もかもが無くなったと思われていた中で、生きる力をもった人たちの強い意志と行動力に感動し、何事も諦めなければ希望は無くならないと学びました。

僕は被爆四世です。当時、１５歳だった曾祖母は爆心地から２．３キロ地点の所で被爆しました。建物疎開の手伝いをしているときに腕に大火傷を負いました。今でも火傷の跡は残っています。そんな曾祖母は、原子爆弾投下直後、負傷者が収容された似島へ向かうトラックの荷台に乗せられた時に、アメリカ軍の飛行機が上空を旋回していたことを僕に何度も話してくれました。何十年も昔の記憶が鮮明に思い出されるということは、よほど怖かったんだろうと思いました。８０年以上経った今でも、忘れられない被爆者の思いは、広島に生きる僕たちが語り継いでいかなければならないと強く思いました。

最近のニュースでは、戦争の話が絶えず聞こえてきます。大人たちはよくこう言います。「喧嘩をしたなら、話し合い、違いを認め合い、ちゃんと謝ることが大切だよ」と。それなのに、どうして傷つけ合うことが減らないのか不思議に思います。なぜ、話し合うことができずに、人を傷つけ合ってしまうのでしょうか。一旦立ち止まり、互いのことを考えること。勇気をもって歩み寄ること。これらのことこそが、僕たちが大切にするべき使命ではないでしょうか。

これまで色々な人が立ち上がり、積み上げてきた「平和」という名のピース。高齢化により、当時の惨状を知っている人が減少する中で、今僕たちができることは、被爆者の方から、しっかり話を受け継ぎ、世界に発信し続けることだと思います。



あの日のことを忘れないために

広島市立牛田新町小学校　石亀　衛

１９４５年８月６日、たった一つの原子爆弾によって、多くの命や日常、かけがえのないものが一瞬で奪われました。街は消え、人々は傷つき、すべての夢や希望まで焼き尽くされました。

もしも自分の「大切なもの」が一瞬で消えてしまったら、ぼくたちはどんな気持ちになるのでしょう。

ぼくは小学三年生の頃、岡山から広島へ引っ越してきました。それまで戦争のことはうっすらと理解していても、原子爆弾の脅威や広島・長崎に落とされた過去すら知りませんでした。

８月６日の平和学習で、具体的に何が起こったのかを映像や写真で知ったとき、恐怖で足がすくんでしまいました。「もしもあの時、あの場にいたら」「もしもあの時代に生まれていたら」どんなに苦しく、悲しかっただろう…と頭で考えるだけで胸が締めつけられました。同時に、今の自分がどれだけ幸せなのか、先人たちが残してくれた平和のありがたさと当たり前の日常の尊さを痛感しました。二度とあのような過去が繰り返されてはいけません。しかし、未来に戦争が起きる可能性はゼロではなく、現に世界各地では緊迫した状況が続いています。原子爆弾のような恐ろしい核兵器が再び使われるかもしれないことに、日本人はもっと危機感を持って問題認識していくべきだと思います。

戦争は、国家間の大きな対立だけでなく、世界中の人々の小さな誤解や争いの積み重ねから生まれます。だからこそ、ぼくたちは日頃から戦争の恐ろしさを知り、「二度と戦争をしてはいけないこと」「二度と核爆弾を使ってはいけないこと」を誓い、それを次世代に伝えていかなければなりません。そのためには、単に悲惨さを知るだけでなく、平和を守るために自分にできることを考え、行動することが必要です。

現在、被爆者の方々は「証言者」として、自身が体験したことを未来に伝える努力を続けられています。彼らは、戦争や核兵器の恐ろしさを自身の姿や体験を通して伝えています。しかし、その数は年々減少しており、直接話を聞ける機会も少なくなってきました。だからこそ、ぼくたち子どもがその想いを受け継ぎ、しっかりと正確に伝えていくことが重要です。

ぼくが広島で学んだことは、「平和」とはただの理想や抽象的な言葉ではなく、世界中の強い願いと多くの人々の努力の結晶だということです。そして当たり前に存在するものではなく、守ろうとする意志と後世につないでいこうとする切実な願いの上に成り立っています。

小さな行動や些細な言葉ひとつでも、ぼくたち一人一人が積み重ねることで未来に確かな希望を届けることができると信じています。

広島での経験は、ぼくにとって単なる学習の場ではなく、人生の価値観を大きく揺さぶる貴重な機会となりました。今、ぼくたちの行動や想いが、未来の平和につながる大切な一歩になると胸に刻み、これからも学び、伝え続けたいと思います。



当たり前の毎日

広島市立牛田小学校　井上　晃成

あなたにとって平和とは何ですか。

私にとって平和とは、みんなが笑顔で暮らせる「当たり前の毎日」だと思います。家族と一緒に温かいご飯を食べたり、学校で友達と楽しくおしゃべりをしたりする、そんな日常の中にある何気ない時間こそが、本当の幸せなのだと思います。

しかし、今から８１年前の１９４５年８月６日、午前８時１５分。広島の上空に原子爆弾が投下され、一瞬の閃光と爆音によって、まちは地獄へと変わり、多くの命が奪われました。生き残った人々も、心と体に深い傷を負い、その苦しみは今もなお続いています。

あの日の悲劇を二度と繰り返さぬように、広島の人々は、核兵器廃絶を世界に訴え続けています。しかし、残念ながら今もなお世界では戦争が続いています。同じ過ちを繰り返さないために、私は広島に生きる一人として三つのことを大切にしていきます。

第一に「平和について正しく知り伝え続けること」です。先日、広島平和記念資料館を訪れた際、展示されている遺品や写真を見て衝撃を受けました。黒く焦げたお弁当箱や人が座っていた影が残る石、それらはかつて私と同じように「当たり前の毎日」を生きていた人がいた証です。この事実を私

たちは決して忘れてはなりません。被爆者の声を直接聞けなくなる時代が近づいているからこそ、広島に生きる私たちが歴史を学び、家族や友達と「平和って大切だね」と語り合うことが悲劇を繰り返さないための防波堤になると信じています。

第二に「身近な人への思いやりを大切にすること」です。世界で起きている戦争も、その始まりは、小さな意見の食い違いや相手を認めない、自分勝手な心からだと思います。だからこそ私は、自分と違う意見にもしっかりと耳を傾けたい。「自分とは考えが違うけれど、そういう考え方もあるんだね」と認め合う心を持ちたい。誰かが困っていたり、嫌な思いをしていたら助けたい。そんな身近なところからの小さな平和を一つずつ積み上げていくことが世界から争いを無くす大きな力になると考えます。

第三に「当たり前の毎日に感謝すること」です。朝、「おはよう」と言えること。学校へ行って勉強ができること。その一つ一つの瞬間が奇跡のようなものなのです。私たちが笑顔で過ごすことこそが、平和な未来を作るためのエネルギーになると信じ、一日一日を大切にします。

平和とは遠いものに感じるかもしれませんけれど、それは私たち一人一人の優しさや思いやりが形作るものなのだと思います。私は広島に生きる６年生として被爆者の思いを引き継ぎ、これからも平和を願い、自分にできることから行動し続けることを誓います。



本当の思いを

広島市立矢賀小学校　佐伯　彩希

私たちがくらす社会にはたくさんの人がいて、たくさんの考え方を持つ人がいます。また、考えが違う人と日々交流をしています。

しかし考えの違いが争いを起こすこともあります。宗教や信じるもの、考えることが違うのは当たり前なはずなのに、なぜ争うのでしょうか。私は認め合う気持ちと姿勢が足りていないからだと思います。もしそれが平和に関することであれば、なおさら大切だし、だれかに合わせた「にせもの」の思いより、「本当」の思いの方がより多くの人の心に残る言葉が生まれるのではないでしょうか。

私は学校でたくさん平和学習をしてきました。クラスの中で「平和意見交流会」をしたとき、みんなが違った意見を教えてくれました。いじめや他の国で起きている戦争など現状について、考えさせられました。交流することで新しい考えにふれ、より平和に対する思いが深くなっていきました。そして、みんなの平和を願う気持ちは同じでも、少しずつ違った意見でそれを交流することが重要なのだと分かりました。また、みんなが自分の考えを言えて、だれかに合わせなくてよい世界をつくるには、みんながお互いに認め合

わなければならないのだと思いました。

私は学校で庭田杏珠さんという、平和活動をされている方のお話を聞きました。庭田さんは、私の通う学校の卒業生で戦前の写真をカラー化し、被爆者の方の思いや記憶を引き継ぐ「記憶の解凍」という活動をされているそうです。私はお話を聞いて新たな考えをここでも知れました。被爆された方の中には、大切な人をなくした方もいます。そこで庭田さんは、その思い出の写真に色をつけ、記憶を蘇らせているそうです。私は、庭田さんのお話を聞くまで、戦争や原子爆弾の辛い歴史だけをみていたので戦前の幸せな記憶を見れていませんでした。辛い歴史から目をそらすのではなく、戦争が起きる前を見ることで、戦争が何をうばったのか、どれほど辛いものか改めて知ることができました。

考えが違う人と認め合うことはとても大切で、相手の意見に耳をかたむけることは自分自身の成長にもつながります。また、争いを減らし、平和で調和のとれた社会を実現する一歩になると思います。「認め合い」は一人ではできません。一人一人に「相手を知ろうとする」、「平和でいたい」という強い思いと行動があれば、よりよい平和な世界になると信じています。私も人任せにせず、自分事として行動していきます。



広島に住む子どもの責任とは？

広島市立大州小学校　藤井　環太

１９４５年８月６日、午前８時１５分。一発の原子爆弾によって、広島の町は一瞬にして焼け野原となりました。

あの日から８１年という月日が流れました。今の広島は緑にあふれ、美しい町並みが広がっています。だからこそ、ぼくは６年生になった今でも、この場所に本当に原子爆弾が落とされたということが、心のどこかで信じきれない思いがあります。しかし平和学習を通して知れば知るほど、あの日起きた出来事は、ぼくの想像をはるかに超える悲しくて残酷な現実であったと、突きつけられるのです。

ぼくは、昨年、被爆者の山本玲子さんから当時のお話を聞きました。特に印象に残っているのは、当時の何気ない学校生活のことです。学校はとても楽しく、友達と笑い合って過ごしていたこと。校庭の真ん中には、大きな防空壕が掘られていたこと。空襲警報のサイレンが鳴るたびに、学年ごとに決められた防空壕の中へ逃げ込んでいたこと。当たり前の日常のすぐ隣に、常に死の危険が迫っていた事実を知り、ぼくは胸が締め付けられるような思いがしました。

山本さんは、当時をふり返り、「思い出すのも辛い記憶だけれど、二度と同じ思いを誰にもしてほしくないから話している。」とおっしゃっていました。もし自分が山本さんの立場だったら、見ず知らずの誰かにこれほど苦しい経験を語ることはできません。きっと、言葉に詰まり、逃げ出したくなってしまうはずです。それでも語り続ける山本玲子さんの姿を見て、ぼくはその願い

をただ「聞く」だけで終わらせてはいけないと感じました。現代の平和な日常生活に、日々感謝して過ごしたいと改めて思います。

他にも、ぼくは広島にある似島の歴史についても学びました。これまで、ぼくは広島の歴史といえば原子爆弾の被害という悲惨な側面しか知りませんでした。しかし、似島にはかつて、戦争から帰ってきた兵隊さんや馬を検査し、病気から市民を守るための「検疫所」があったことを知りました。広島はただ被害を受けただけの場所ではなく、軍都として戦争に深く関わっていた歴史も、もっているのです。こうした多角的な歴史を知ることで、平和がいかに多くの犠牲の上に成り立っているかを、より深く考えるようになりました。

今、被爆者の方々が亡くなっていく中で、広島に住むぼくたち子どもには、大きな責任があると考えます。それは、被爆された方々から受け取った「平和のバトン」を、自分たちの代で途絶えさせることなく、未来へつなぐことです。

一人の力は、小さな紙の切れはしのようなものかもしれません。簡単に破れてしまうし、風に吹き飛ばされてしまうほど、か弱い存在です。しかし、その紙が何十枚、何百枚、そして何千枚と重なれば、どんなに強い力を入れても破れない、分厚く、頑丈な「平和の壁」になります。争いを受け止めるほど大きなことはできないかもしれませんが、戦争に反対したり、意見表明をしたりすることはできます。

過去の悲劇を正しく知り、今の平和に感謝し、そして自分の言葉で誰かに伝え続けていくこと。広島で生まれ育った一人として、ぼくはこの責任を胸に刻み、平和な未来を築くために歩んでいくことを誓います。



知ること、知ろうとすること

広島市立比治山小学校　長本　亜怜

「それなら、ひいおばあちゃんの話を聞いてみたらどうかな。」

学校での平和学習について話すと、父がそう言いました。

「うん。」

と返事をしたものの、その時の私は、曾祖母の悲惨な体験を想像もしていませんでした。

私の曾祖母は、広島電鉄、家政女学校の生徒でした。当時は、寮生活をしながら、電車の車掌や運転業務をして働いていたそうです。

８月６日の朝、曾祖母が一人で当番の仕事をしていたところ、突然目の前が「ピカッ」と光り、建物の下敷きになりました。助け出された時には、先生の白いシャツが真っ赤に染まるほど、傷だらけになっていたそうです。見知らぬ男子生徒の手を借り、御幸橋の近くの防空壕まで避難しましたが、防空壕は人であふれかえり、曾祖母は救護所を転々とします。やっとの思いで自分の家に帰り着いたのは、被爆後５日以上が経ってからでした。

あの日を境に、同じ寮の友達とは、一人も会えないことを、曾祖母は教えてくれました。私はそれまで曾祖母が被爆していたことを知りませんでした。もしもあの朝、曾祖母が当番でなく、他の生徒と同じように寮を出ていたら…。このときはじめて、原子爆弾が、私の胸に自分事として迫ってきたのです。

私の学校からは、比治山が見えます。比治山は原子爆弾が落とされたときに、多くの被爆者が避難した場所です。５年生の平和学習で、比治山にある陸軍基地を訪れたとき、たくさんのお墓が並ぶ光景に衝撃を受けました。そこで、比治山が「平和の丘」と呼ばれていることを知り、それまで単なる山だと思っていた比治山が、平和のシンボルと感じられるようになりました。

曾祖母の被爆体験、そして、比治山での平和学習から、私は「知る」ことの大切さを実感しました。

曾祖母の足には、今でも傷跡が残っています。その傷跡を見ると、「知らない」と見逃してしまう事実がたくさんあることに気付きます。そして、「知ろう」とすること、関心を向けることの大切さを実感します。「知る」と、自分の意識が変わり、「知らない」ときよりも、ずっと自分事として考えられるようになるのです。

今、世界では戦争が起こっています。戦争をしている人たちは、戦争の、そして原子爆弾の事実を知っているのでしょうか。過去の悲惨な出来事を知れば、戦争を望む人などいないのではないでしょうか。

私はまだ、原子爆弾や戦争について多くを知っているわけではありません。でも、曾祖母の被爆体験を知り、「知ろう」という思いが生まれました。「伝えよう」という思いを持ちました。

私はこれからも事実を学び、世界の人たちにヒロシマのことを伝えていきます。もう二度と、曾祖母のような悲惨な体験を、世界中のだれも体験することがないように。



似島で学んだ命の重み

広島市立皆実小学校　鎌田　桜空

８１年前の８月６日、笑顔があふれる平和な広島。そんな広島に、たった一つの原子爆弾が、人々の笑顔や平和な日常をうばうおそろしい出来事が起こりました。

昭和２０年（１９４５年）８月６日、緑豊かで平和な広島のまちが、一瞬で焼け野原のまちへと変わってしまったのです。

一瞬で焼け野原になった広島。その悲劇を引き起こしたのが、わずか一つの爆弾でした。その爆弾、リトルボーイの重さは約４トン。私たちが普段見かける大きなトラックと同じぐらいの重さです。たった一つの爆弾が、何万人という人の命をうばい、人々の日常を、夢を、そして大好きな人との時間を一瞬でうばい去りました。私は４トンという数字を何度も頭の中でくり返しました。それは、私には想像もできないほど重く、おそろしい数字です。しかし、その重さ以上に重いのは、あの日亡くなった一人一人の「命の重み」ではないでしょうか。

私は５年生のとき、似島に行きました。ユーハイム似島歓迎交流センターで当時の話を聞き、島を歩いたときのことを今でも鮮明に覚えています。広島湾に浮かぶこの静かな島は、被爆直後、やけどを負った多くの人々が船で運ばれてきた「救護の島」でした。でも、そこはただの救護所ではありませんでした。薬も足りず、水も満足に飲めない中、多くの人々が苦しみながら息を引きとった場所でもあったのです。センターの近くや島のあちこちに、今も多くの遺骨が眠っていると聞きました。おだやかな波の音を聞きながら、私は思わず足元を見つめました。今、私たちが歩いているこの土の下に、か

つて懸命に生きようとしただれかの証がある。そう考えたとき、これまでどこか遠い昔の出来事だと思っていた「８月６日」が、急に自分のすぐそばにある物語として心につきささったのです。

似島から広島のまちを眺めると、今は高いビルが立ち並び、緑が豊かで、とても美しい景色が広がっていました。８１年前、ここが焼け野原だったなんて、今の景色からは想像もできません。でも、この平和は当たり前にやってきたものではありません。絶望の中から立ち上がり、「広島には７５年間、草木も生えない」と言われながらも、必死にまちを再建した人々の強い思いがあったからです。今の私たちが、友達と笑い合い、学校で勉強し、家族と一緒にご飯を食べる。この当たり前すぎる日常こそが、あの日失われたものであり、復興させた人々が守りたかった「平和」なのだと気づきました。４トンの爆弾はまちをこわしましたが、広島の人々の「生きたい、復興させたい」という強い心まではこわせなかったのだと思います。

被爆から８０年以上が経ち、直接お話を聞くことができる機会は少なくなっています。だからこそ、似島で感じたあのふるえるような思いや、４トンの重みの衝撃を、私たちが次の世代へ伝えていかなければなりません。私たちにできることは、まだ小さいかもしれません。でも、だれかの痛みを自分のこととして考えること、身近な友達と仲良くすること、そして、広島で起きたことを哀れむのではなく、語り継いでいくこと。それが、今の私にできる精いっぱいの「平和」への一歩だと思っています。

あの日、亡くなった方々の「生きたかった未来」を、私たちは今、生きています。この美しい広島のまちを、そして人々の笑顔を、二度とうばわせない。４トンの爆弾よりずっと重い「命の尊さ」を胸にきざみ、これからも平和について学び続け、世界中に広げていきます。



みんなで築く本当の平和

広島市立観音小学校　内田　莉乙捺

あなたにとって、本当の平和とはどんなものですか。あなたが幸せだなと思える瞬間はどんな時ですか。私は、戦争がないことが本当の平和だと思っていました。ですが、５年生になって、私の中の本当の平和というものの考えが変わりました。

１９４５年、８月６日、午前８時１５分、この日時に、リトルボーイという原子爆弾が落とされました。その瞬間、広島の町は、建物や人の命、それだけでなく、生きていく希望も、未来もうばわれてしまったのです。戦争というものは、関係の無い、普通に暮らしていた人達も巻きこんでしまうものです。戦争は、二度としてはいけないと思います。

私は５年生になって、平和学習で被爆者の方からお話を聞いたり、広島平和記念資料館に行って、原子爆弾がどれだけ恐ろしいものなのか、その時の広島の悲惨さや、平和の大切さを学んだりしました。改めて、戦争は絶対にしてはいけないものだと思うと同時にある疑問がうまれたのです。

その疑問とは、平和について知るだけでいいのか、考えるだけでいいのか、知ったこと、考えたことを伝え、行動にうつしていかないと意味がないのではないかという風に思いました。だから、国語の授業で「知ることの先にあるもの」について考えました。その結果、「知ることは行動するためのヒント」

という答えを出した私たちは、もう一度、平和学習にもどって「平和を伝える学習」に取り組みました。

その中で私は、外国の方にも「本当の平和」について考えてもらいたいと思い、外国の方に向けて、英語のパンフレットをつくりました。最初は何も分からなくて、翻訳機に頼っていたけれど、それでは私の本当に伝えたいことが伝わらないと思い、経験を伝えてくれる人や、友達の意見から文章をつくり、英語の先生にその文をどういう風に英語にすれば良いか質問したりして、私一人ではできなかったパンフレットをつくりあげることができたのです。この経験を通して、私たちが今、笑い合って過ごしたり、泣いたり、怒ったりできている日常はとても幸せなことだと分かりました。

私たちは、本当の平和について考えました。あなたにとって本当の平和とはどんなものですか。昔の私は、戦争がないことが本当の平和だと思っていました。もちろん、戦争がないことも平和の一つですが、平和学習をして、本当の平和とは、みなさんの命があり、そのありがたみを、尊さを、この世界中のみんなが分かち合うことができることだと私は思います。それを感じたとき、大切なのは、相手の気持ちを考え、人を思いやること、まずは自分から変えていくことが平和への第一歩だと思いました。

きっと、本当の平和に正解はない。だからこそ、一人一人が平和について考えることが平和な世界につながっていくのではないでしょうか。みんなで本当の平和を築きあげていきましょう。



「おはよう。」僕からまく、平和の種

広島市立鈴が峰小学校　大田　航史郎

朝、目が覚めて温かい朝食を食べる。学校へ行き、友達と冗談を言い合って笑い合う。夜は安心して眠りにつく。僕たちが毎日、当たり前のように繰り返しているこの日常こそが、実は「平和」そのものであると考えます。

以前の僕は、平和とは「戦争がない状態」という、どこか遠い国の話だと思っていました。しかし、広島の平和学習でふれた事実は、その考えを大きく変えました。昭和２０年（１９４５年）８月６日、午前８時１５分。一発の原子爆弾が広島の町を地獄へ変えました。写真で見た「８時１５分で止まった時計」や「真っ黒に焦げたお弁当箱」は、今の僕と同じような日常を生きていた人々が、一瞬にしてその全てを奪われたことを無言で訴えていました。

特に僕の心に残っているのは「原爆の子の像」のモデルになった佐々木禎子さんの話です。今の僕と変わらない１２歳という年齢で生きたいという願いを込めて折り鶴を折り続けた彼女の無念さを思うと、胸がしめ付けられます。平和とは、こうした一人の少女のささやかな願いさえも守りぬくことなのだと強く感じました。

ところが、現代に目を向ければ、再び暗い影が世界をおおっています。ニュースで流れるイランとアメリカの緊張した情勢です。ミサイルが飛び交い、がれきの中で涙を流す人々の姿は、８１年前の広島の光景と重なって見えます。歴史から学んだはずの悲劇を、人類はなぜ繰り返そうとするのでしょうか。

世界平和という大きな目標を前にすると、一人の児童である僕にできるこ

となど何もないように思えてしまいます。しかし、広島で被爆者の方が語っていた「相手を思いやる心が平和の基礎である」という言葉が、今の僕に深く響いています。

世界中で起きている争いの根源を探ればそれは身近にある「誤解」や「偏見」そして「自分だけが絶対に正しいと思い込む心」から始まっていると僕は考えます。教室での小さなトラブルや、誰かを傷つける言葉。これらは規模こそ違えど、本質的には対立や差別と同じ根っこをもっています。自分と意見が違う人を排除しようとする心がやがて大きな衝突や争いへとつながっていくのではないでしょうか。

平和な世界を作るためには、僕はまず、自分の言葉に責任をもちたい。誰かを傷つける言葉ではなく、誰かの心を温める言葉を選んでいきたい。また、広島の平和学習で学んだ事実を忘れず、今の現代社会で何が起きているのかを正しく知りたい。なぜなら、正しい知識は、偏見という大きなかべも取りこわせるほどの武器になると思うからです。

平和記念公園内にある広島平和都市記念碑には、「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」という言葉が刻まれています。この誓いを守り、未来へつないでいく責任があるのは、まぎれもなく今の時代を生きる僕たちです。

平和とは、誰かから与えられることを待つのではなく、僕たち一人一人が相手を思いやり、歩み寄ることで築き上げていくものです。

僕は、今日から、自分の周りに「平和の種」をまいていこうと思います。他者を尊重する小さな一歩が、いつか世界を動かす大きな力になると信じているからです。広島の祈りを絶やすことなく、未来へつなぎ、世界中が笑顔で満たされる日が来ることを、僕は心から願っています。



未来につながなくてはならないこと

広島市立高須小学校　柿崎　由宇

私は、もともと東京で生まれ育ち、広島に転校してきたのは１年生の８月６日のことでした。原子爆弾についての知識は全くなく、その事実を初めて知ったのが、転校してきたその日だったのです。

学校から帰ると、お母さんが真剣な表情で語りかけてきました。

「お母さんとお父さんは東日本大震災を経験して、当たり前の日常がいかに簡単に奪われるのかを知ったの。あの震災はおよそ２万人もの命を奪った、本当に恐ろしい地震だった。今日あなたが習った原子爆弾は、さらに多くの、１４万人もの命を奪った核兵器なのよ。難しいかもしれないけれど、このことは忘れないでね。」

お母さんの言葉は重たかったけれど、当時の私にはピンときませんでした。

「なんでそんな暗いこと、わざわざ覚えないといけないの？」

と、どこか他人事のように感じていたのです。４年生になった私は、ひろしま平和ノートの学習を通じて、考えるようになりました。なぜ戦争が起きるのか、なぜ広島に原子爆弾が落とされることになったのか…。

まず、なぜ戦争が起きるのか考えてみました。ニュースや歴史の本を見てみると、そこには「自分の国だけが良ければいい」という考えや、言葉で解決できないほどの激しい怒りがあるように感じます。それは、学校での小さなけんかの理由と、どこか似ているのかもしれません。相手の気持ちを想像する

ことをやめてしまった時、争いは始まってしまうのではないでしょうか。

次に、なぜ広島に原子爆弾が落とされたのか調べてみました。それは、軍事・戦略上の拠点であったことや、原子爆弾の威力を正確に測定するためでした。第一目標が広島、第二目標が北九州、第三目標が長崎でした。当日、広島の上空の天候が良好だったため、アメリカが計画していた通り広島に投下されました。もし広島が雲に覆われていたら、別の都市が最初の被爆地になっていた可能性があります。

一瞬で街を破壊し、人々の心を恐怖で支配しようとする、核兵器の恐ろしい意図がありました。お母さんが言った震災の死者数２万人も想像できないほどの数字ですが、原子爆弾の１４万人は、その何倍もの命が、たった一発の爆弾で奪われたことを意味しています。

１年生の頃は、他人事のように感じていた私ですが、今は違います。お母さんが震災を語り、広島の人が原子爆弾を語り続けるのは、二度と同じ悲しみを繰り返してほしくないという「願い」があるからだと気づいたからです。震災と原子爆弾で奪われた人々の命や日常、そこには今の私と同じように、家族と笑い、ご飯を食べ、明日を楽しみにしていた人たちがいたはずです。その人たちの、「生きたかった未来」を、今、私たちは生きています。

私たちが未来につながなくてはならないこと。それは、ただ歴史の数字を覚えることではありません。かつて起きたことを自分事として受け止め、周りの人と認め合い、小さな平和を積み重ねていくことだと思います。

８月６日に広島にやってきた意味を胸に、私はこの街で、平和のバトンを繋いでいきます。



忘れない　戦争の記憶

広島市立川内小学校　松田　芙由子

「山に掘られた防空壕よりほか、今逃れる場所はない」

これは、戦時中、当時学生だった私のひいおばあちゃんが残した記録の一部です。ひいおばあちゃんは、戦時中に学徒動員で働いていたと聞きました。私はその話を聞きながら、当時のひいおばあちゃんの気持ちを想像しました。きっと、毎日が不安で、苦しくて、つらい日々だったのだと思います。

ひいおばあちゃんは、そんな中でもたくさんの短歌を残してくれました。

「国防色　モンペ穿き寝る　夜の夢は　帰省かなわぬ　故郷の村」

この短歌から、私は強く「帰りたい」という思いを感じました。本当は、挺身隊の歌を歌ったり、工場でねじを磨いたりするよりも、家に帰って家族に会いたかったのではないかと思います。もし私が同じ立場だったら、空襲警報の鳴る中で働くことに強い恐怖を感じたと思います。家族も不安な時間を過ごしていたはずです。

その後の出来事を詠んだ短歌も残されています。

「寄宿舎の　窓どんと揺れ　ぽっかりと　彼方の空に　キノコ雲湧く」

これは、原子爆弾が落とされたときの様子です。突然の出来事に、どれほど驚き、恐ろしかったことでしょう。私だったら、何が起きたのか分からず、混乱して、ただ泣いてしまうと思います。しかし、ひいおばあちゃんは泣いている間もなく、病院へと送られました。

「一瞬に　広島消えゆと　病院に　送られてくる人々無惨」

「怪我ひどき　人を支えて　病院の　廊下ゆく吾の　胸ふさがりぬ」

この短歌からは、目の前の現実の悲惨さと、それを受け止める苦しさが伝わってきます。私が広島平和記念資料館で見た原子爆弾投下直後の広島の絵

は、まるで地獄のようでした。そんな中でも、ひいおばあちゃんは必死に人々を助けていたのだと思います。

やがて終戦の日を迎えます。

「整列し　聞く玉音に　涙しつつも　終戦を知る　かすかな安堵」

この短歌を詠んだとき、私は「安堵」という言葉に強く心をひかれました。ひいおばあちゃんは、国のために一生懸命働いてきました。でも本当は、戦うことよりも、普通の生活を送りたかったのではないでしょうか。友達と遊んだり、好きなことをしたりする、そんな当たり前の毎日を。だからこそ、戦争が終わったとき、日本は負けたけれど、「もう戦わなくていい」という思いから、少しだけ安心したのだと思います。私は、この戦争の記憶を決して忘れてはいけないと思います。もし忘れてしまったら、同じ悲しみがまた繰り返されてしまうかもしれません。多くの命が奪われ、人々の心が傷つくような出来事は、二度と起こしてはいけないと思います。

ひいおばあちゃんは、亡くなっていて、思いを直接聞くことはできません。でも短歌という形で思いを残してくれました。その一つ一つには、「同じことを繰り返してほしくない」という願いが込められているのだと思います。私はひいおばあちゃんのように強くはなれないかもしれません。それでも、被爆四世として、この出来事を忘れず、友達や周りの人に伝えていきたいです。

言葉には、人の思いを未来へとつないでいく力があります。私もひいおばあちゃんのように、自分の言葉で平和への思いを残し、この記憶をつないでいきたいです。

「消えないで　悲しい記憶と　人の声　つなぐ思いが　未来を守る」

私は自分の平和への思いを言葉にして、これからも平和について考え続けていきたいです。どんなに時代が変わっても、人の命の大切さや、戦争の悲しさは変わらないと思うからです。

本当の別れとは、会えなくなることではなく、忘れてしまうことだから。



みんなで作り上げる温かい場所

広島市立高南小学校　河野　和希

１９４５年８月６日午前８時１５分広島は生きる希望と光を失いました。「世界が平和になるために、自分に何ができるだろう」そんな問いに、皆さんは、どう答えますか。今のぼくは、世界から戦争が消えること、そのために一人一人がたった一つの命を大切にし、思いやりの心をもつことが大切だと信じています。

でも最初からそう考えていたわけではありません。ぼくは、社会の授業で平和について学んでいても、どこか「昔あった話」のように感じることしかできませんでした。

そんなぼくの意識が変わったのは広島市で毎年開催される「フラワーフェスティバル」に地域のよさこいチームの一員としてパレードに出演した時でした。平和大通りを埋め尽くす、数えきれないほどの人。世界中から集まった外国の方々の姿もたくさんありました。カチカチと鳴子を鳴らし、一生懸命に踊り切ると、たくさんの方から拍手をもらいました。言葉が通じなくても、心がつながったような不思議な感じでした。直後、「広島の街は今、こんなに平和にあふれているんだよ」そんな気持ちがこみ上げてきました。一人の平和を願う力が、踊りを通してだれかに伝わり、それが世界へと広がっていく。あの日、ぼくは広島の子どもとして、平和を作り上げるための一員になれたような気がしました。

そして、ぼくの平和への思いをさらに強くしたのは、家族で沖縄に行った時の経験です。ぼくが沖縄に行く前にもっていたイメージは「海がきれいでおだ

やかな島」でした。けれど、そこで見た事実は、僕の想像をはるかに超える恐ろしいものでした。ひめゆり平和祈念資料館で読んだお話には、逃げ場を失って海に飛び降りなければならなかった人や、死ぬほどの恐怖の中でかくれていた家族のことが書かれていました。僕が今観光で歩いているこの美しい島もかつては、広島と同じように激しい火の海に包まれたのだと知って本当に怖くなりました。特に忘れられないのは、犠牲者の名前が刻まれた「平和の礎」の住所の欄に、「広島」と書かれている文字を見つけたときのことです。思わず母に尋ねてみると、母は静かにすべて亡くなった人だと教えてくれました。

なぜ、罪もない広島の人がこの沖縄の地で死ななければならなかったのか。広島と沖縄、遠く離れた二つの場所が戦争の悲しみで一つにつながった瞬間でした。

今、世界では８０年前の広島や沖縄で起きたことと同じ悲劇がどこかで続いています。小学生のぼくにできることは、「相手の気持ちを考え、思いやること」だと考えます。沖縄で亡くなった、あの方に帰りたかった広島の家があったように、よさこいを見て、拍手を送ってくれた外国人の方にも、平和を願うふるさとがあります。クラスの友達も同じです。もし意見が合わない人がいたとしても、その人にも大切にしている考え方がきっとある。ぼくがしなければいけないのは、その「大切にしているものは何だろう」と相手の立場に立って考えることです。広島と沖縄そして世界がつながったように、ぼくも「思いやり」の橋を周りの人にかけていきたいです。世界中の人々がお互いを思いやって過ごせる「温かい場所」そんな世界を作り上げていきます。



原子爆弾は僕たちに何を教えたのか

広島市立矢野小学校　和田　啓汰

「ドーン」と耳をつんざく音。周りを見ると建物が消え、血を流した大勢の人たちが…。

これまで、原子爆弾の被害について、たくさん学んできた。でも、僕にはわからない。たった一瞬で広島が消えたあの日、何が起こっていたのか。だからこそ、小学６年生の僕なりに、その答えを考えてみました。

僕のひいおばあちゃんは被爆者です。ひいおばあちゃんは、当時のことを家族に話そうとしてくれなかったと聞きました。さらに、被爆者健康手帳を受け取りたくなかったそうです。僕はそれを聞いて、ひいおばあちゃんにとって、当時のことは、思い出したくないほど悲惨な出来事で、差別されたくないという不安で、いっぱいだったのだと思いました。

また、忍岡妙子先生から、在日韓国人二世のパク・ナムジュさんの被爆体験伝承講和を聞くことで、多くの外国人の方々も被爆されたことを学びました。忍岡先生の「正義の戦いはない。勝っても負けても、戦いは正義ではない」という言葉が、心に強く残りました。だから僕は、本当に戦争はただの殺し合いで、正しい戦争はないと、改めて感じました。

加えて、アンパンマンの作者、やなせたかしさんも、

「どの国も、自分こそが正しいと思って戦争をする。でも、戦争は結局、殺し合いだ。色々な理屈をつけて戦うけれど、正義の戦争なんていうものはないんだ。」

と言っていました。やっぱり、戦争はただの殺し合いでしかありません。

僕は、核兵器は今の世界に必要ないと考えます。「自分の国を守るため」に作ったとしても、それを使ってしまうと、相手の国の多くの命をうばうだけです。そもそも僕たち人間は、殺し合いをするために生まれてきたわけではありません。考え方が違って、気が合わなくても、仲間を思い、助け合う。自己中心的な行動をしない。そういう当たり前の優しさをもつことが、平和に一歩近づくために、僕たちに今、できることではないでしょうか。

そして、もう一つ。僕たちにできることは、原子爆弾や今の世界について知り、行動を起こすことだと、僕は考えます。原子爆弾は、多くの人を殺し、多くの建物をこわし、自然を破壊することで、そのおそろしさを僕たちに見せつけました。その時の悲しみが伝わったからこそ、今の僕たちの決意があります。

だからこそ、僕は歴史を正しく学び、伝えていきます。二度と同じ過ちを繰り返さないために、まずは、目の前の仲間を大切にすることから、僕の「平和」を始めていきます。



私たちがつなぐヒロシマの記憶

広島市立みどり坂小学校　福井　紗都

皆さんは今、どんな生活を送っていますか。朝起きて、それぞれの仕事につき、家族とご飯を食べて、寝る。私たちにとって当たり前の日常が約８０年前のあの日、たった一瞬にしてかき消されました。当時、私たちはまだ生まれていません。だからこそ私たちには、あの日の出来事を知り、語り継ぐ使命があるのです。

１９４５年８月６日８時１５分、私の曾祖母は爆心地から１．５キロメートル離れた、舟入に住んでいました。曾祖母は、自宅の玄関でＢ２９が落とした原子爆弾を見ていました。その瞬間、家が崩れ落ち、近所の人たちと必死に逃げました。足が熱くなっているのに気づかないくらい必死に。逃げながら飲み水をさがしていると偶然、畑になっていたトマトを見つけました。苦手なはずのトマトも、あの日だけはおいしく感じられました。目の前を通り過ぎていく人々は、皆、無表情です。原子爆弾は、家や人の命だけでなく、当たり前にあるはずの感情や表情までも奪ってしまったのです。葬式の話も出ていた曾祖母は、奇跡的に助かりました。このとき、曾祖母が命をつないでくれたおかげで、今、私はここにいます。被爆者である曾祖母は、当時の記憶を私たちに教えてくれます。

そんな被爆者は今、少なくなってきています。あの日の記憶を風化させない

ためには、今ここにいる私たちが、被爆者から直接話を聞き、それを未来へと語り継いでいくことが大切です。

世界には、今も戦争をしている国があります。人々は、自分の考えが正しいと思い、戦争を始めます。しかし、その考えは本当に正しいのでしょうか。その考えで変わってしまった世界は、本当に平和なのでしょうか。一人一人の考えは、決して同じわけではありません。だからこそ、一人一人の考えを互いに認め合い、理解し合えばすべての人々が安心できる世界になると思います。命の大切さや人をなくす悲しみを分かち合うことで、戦争はきっと少なくなっていきます。私たちには未来を変えることができるのです。

「争いのない平和な世界になってほしい。」

これは曾祖母が私に伝えてくれた願いです。今では私の願いでもあります。被爆者が少なくなってきている今、当時の記憶をつないでいけるのは、私たちしかいません。被爆者がいなくなってしまったら、ここ広島はどうなるのでしょうか。あの日のことは、もうなかったことになるのでしょうか。そんな広島ではいけません。この記憶を世界に発信し、未来へつないでいく使命が私たちにはあります。ここにいる一人一人があの日のことを忘れなければ、新たな被爆者が増えることはないはずです。

私は曾祖母の願いを必ずかなえます。そして、私たちが「ヒロシマの記憶」をつなぐ継承者となって、平和のバトンを未来へつないでいきます。

Commitment to Peace
August 6, 2026

How would you feel if something you cherish vanished in the blink of an eye?

The reality today is that while we're together laughing and smiling, irreplaceable lives are being lost.
Even as we speak, people are robbed of their ordinary day-to-day lives.

School uniforms in tatters.
A bento box charred black.
These are testimonies of ordinary lives lived.
8:15 am on August 6, 1945.
One single atomic bomb turned the everyday lives of so many into a living hell.
Hordes of people with hair singed and frizzy, covered in burst blisters with burned skin hanging from flesh cried out:
It hurts. It hurts so much.
Help me, mom.
I don't want to die.
There's nothing I can do for you. I'm sorry.
The painful realization that you're going to die and the suffering of having to keep on living is too horrible to even imagine.

As the last generation to hear about the atomic bombing directly from the *hibakusha* themselves,
it is our duty to embrace their memories as the reality of the past.
The willingness to learn with open eyes,
coming face to face with even the saddest aspects:
that is where the truth of those who wanted to survive and those who kept surviving lies.

We, as the children of Hiroshima, have a responsibility to take action.
A responsibility to put ourselves in the shoes of others, to recognize and accept differences in opinions,
to express the will for peace in our own unique ways.
Each and every one of our steps, small as they may be, will contribute to the realization of peace.

Peace is not something that is handed to us. It is something that all of us around the world must build together.
Even we, as children, are a part of this and will take our first steps toward peace
to deliver to the future the irreplaceable things we cherish and steadfast hope.

Children's representatives:
Kakizaki Yu (6th year, Hiroshima City Takasu Elementary School)
Kono Kazuki (6th year, Hiroshima City Konan Elementary School)